

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例について

F. その他

④その他

●名古屋大学理学研究科物質理学専攻物理系

「モノから生体をつなぐ物質科学者養成」の事例

〈後期課程への進学率の向上〉

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

1. 後期課程進学に対する動機付けを与えることを目的の一つとして、(18年度、)19年度、20年度は前期課程入学時に「将来計画と研究計画」について発表させた。しかし、多くの学生は大学院入学時にはすでに前期課程修了後に就職することをかなり強く決めていて、発表の場が結局は前期課程後の就職希望を宣言する場となりがちであった。

2. 「物性生物物理学総合講義」の一つの目的も、多様なキャリアパスを提示することによって後期課程への進学を増やすことにあり、なるべく博士学位をもつ、アカデミックな分野以外で活躍する方に講演をお願いした。しかしながら、博士学位が必須であるあるいは博士学位があれば圧倒的に有利であるというような内容の話にはならない。従って、後期課程への進学の強力な動機づけとはならなかった。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

数年前から、博士学位取得者の進路がマスコミ等で取り上げられるようになった(「余剰博士」、「高学歴ワーキングプア」など)。これらの実態が明らかになることはよいことではあるが、一方、後期課程への進学意欲を妨げる要因であることは間違いない。残念ながら、現状においては、大学院のみの努力ではいかんともしがたい面がある。

本専攻の事情としては、09年度をもって定年退職する教授が3名いたことも後期課程への進学者数減少の一因になった可能性がある。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

1. 前期課程入学時の発表をやめ、21年度からは前期課程の中間時に、研究内容に重点を置いた発表させることにした。効果については今後検証の必要がある。

2. 多くの学生が大学院入学時には前期課程修了後の就職を決めている。従って、後期課程への進学率を挙げるためには、学部教育において研究の面白さ、キャ

リアパス教育を進める必要がある。(本プログラム終了後の) 22年度からこれまで学部3年次に行ってきた最先端研究に関する講義に加えて、2年次学生に対しても同様の講義を行うことにした。

3. 博士課程修了者の社会での評価を上げるために大学院において実施できることは、さらに幅広い能力の向上が図られるようなプログラムをさらに続けることであるが、効果を上げるためには時間はかかるのではないかと思う。